
もうひとつの吉原炎上編 - 夜の兎 -

松本みつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もうひとつの吉原炎上編 - 夜の兎 -

【Nコード】

N7621F

【作者名】

松本みつき

【あらすじ】

私は神楽。血と戦う戦士。私は本当の生きる場所で生きて、やるべきことをして、幸せに生きるから……。絶対に、私を捜さないでね……。もうひとつのシリーズ、第2弾!!!!

1 兎の夢（前書き）

お久しぶりです！ 松本みつきです^^
前回一応連載していた『もうひとつの紅桜編』を間違えて消去して
しまったので、今回は新しい連載を掲載したいと思います！！

今度の主人公は神楽！

そして、血と戦う戦士、神楽の運命とは…

『もうひとつの』シリーズ第2弾、『もうひとつの吉原炎上編 - 夜
の兎 - スタート！！』

1 兎の夢

あれから、俺は当てもなくただふらついていた。

吉原はもう解放された。銀髪の、一人の侍によって。

俺はそいつと戦いたかったが、神楽いもつとからあんなに言われちゃ困る。

別の機会にでも、こっそり戦いたいもんだ。

……そう。俺の名前は、神威。

飴が、間違えた雨が音を立てて地面へと降り注ぐ。私はやることもなくただ外を見つめている。

今日は銀ちゃんも新八もない、薄暗い夜。

定春はもう寝ちゃったし、遊ぶ物なんてもうないよ。

あの時、兄貴はなんて言っただろう。

私を銀ちゃんに任せるって？冗談じゃない。

私はあの時の私と違う。今はもう自分を制御できるし、みんなを危険な目に遭わせるようなことは絶対にしない！！

…なのに、兄貴は私のことを認めてくれなかった。

兄貴は、兄ちゃんは………

何年前になるだろう。私と兄ちゃんが最後に会ったのは。

あの時、兄ちゃんは「いつか戻る」といって私と、病気のマミーを置いて行った。ちゃった。

パピーだって全く戻らない。やがてマミーは死んだ。

私は食べるものが無くなり、お金を求めて地球へとやって来た。

そして、銀ちゃん達と巡り会った。

一時はパピーが私を連れて旅立つと言ったけど、結局はココに留まることになった。

今は昔と比べて立派な“血と戦う”戦士になった。なのに…

私は置いて行かれた。あの時のように。

もうこんなのはイヤだ。二度と独りぼっちになんかなりたくない。

「かぐぐら〜？」

気がつくと、私はそのまま寝込んでいた。

銀ちゃんがいつもの表情で、私の目を覗き込む。

そこまで汚い顔近づけなくていいよ。私は落ち込んでなんかいない。

ただ、考え事をしていただけ…。

「神楽ちゃん、朝ご飯…っていつても白ご飯しかないけど、食べる？」

「…いらないアル」

新八は困ったような顔をして、また向こうへと顔を戻した。

いいよ。そんなに私のことを想わなくて。

私は地球人にんげんと一緒に居ちゃいけないんだ。

今、少しの間でも存在できる…。

それだけで、私は幸せなんだよ。

「神楽……。起きているかい？」

「……兄ちゃん？」

「そつだよ、神楽。俺は宇宙ひそへと旅立つことになった。良かったら一緒に行くか？」

「……うん！」

私は、故郷を捨てる。

でも銀ちゃん、私を捜さないで。

私は本当の私がすべきことをして、

幸せに生きるから……。

1 兎の夢（後書き）

次回、神威に付いていった神楽の行き先は？
神楽sideでお送り致します^^

2 兎の夜

わたしは、いまここにいます。

すきで、あなたのもとをはなれたんじゃない。

ただ、わたしは

あなたたちのしあわせをねがって、じぶんをぎせいにしただけ。

それをわかって。

かぐら

…そんな内容の置き手紙があった。つまり、神楽は今この国に…いや、この地球には居ないのだろう。

神楽は一人でこの星から出られるはずがない。つまり、誰かが連れて行ったことになる。

考えられるのはあのバーコートヘッドしかない。アイツが愛娘を誘拐していったことになる。

…いや、自分の娘だから誘拐にはならないか。

でも、もし“アイツ”が連れて行ったなら……

「銀さん？何を考えているんですか。確かに、神楽ちゃんを心配する気持ちは分かりますけど、あまり落ち込んでちゃダメですよ」

「ああ、分かってる。でも、俺はそんなことじゃなくて別の意味で考え事をしていたんだ」

銀時は立ち上がると、目の前に落ちている平仮名で書かれた手紙を見つめた。

「兄ちゃん？」

「何だい、神楽」

「なんで兄ちゃんは私を連れ出そうとしたの？ あの時、兄ちゃんは私のこと見向きもしなかったのに……」

「それはワケがあるんだ。今、俺は本当にお前を必要としている。それを分かって欲しい」

兄ちゃんはそう言うと、いつもの営業スマイルで私を振り返った。笑顔で殺す。そんなことを思い出してしまい、背筋が寒くなっ

た。
「俺たちはまた戦争をすることになった。今度は夜兔相手じゃない。もっと強い生き物だ。そう、侍」

「侍って…」

「アンタを頼んだ銀髪のお侍さんも同じさ。俺たちは上の命令で動くんじゃない。自分たちの生存を賭けて戦うんだ。分かってくれない、神楽？」

…わからないよ。

私は何をすればいいの？ 銀ちゃん達と戦えっっていうの？

そんなことができるわけがない。

そのために利用されるなんて イヤだ。

たとえば、夜兔を護るためでも。

それから、しばらく私は何もすることなくずっと部屋にいた。

夜鬼の為に戦う？ 何言ってるの。そんな都合の良い事があるわけない。

一族はもうほとんど滅んだ。今更護るってどうかしている。

自分で置いていったんでしょ？ 自分で滅んでいったんでしょ？

また沢山の敵と戦って、血を流して、

そんなことは、もうやめてよ。

2 兎の夜（後書き）

すみません^^; 結構短いですね
手抜きってわけじゃありませんよ!?
今別の作品と平行? いや3作品を一気に進めているんで大変なん
ですよ

次回、いよいよかぶき町が騒ぎ出す!?

乞うご期待を!!

3 兎の街（前書き）

な、なんとこの作品が3話目でPV400、ユニーク230アクセスを突破いたしました！！

こんなに沢山の方が読んで下さっているなんて…感激です。．．．
（）、（）．．．。

今回は結構場面転換多いですが、とにかく第3話始めます〜！！

感想、評価お待ちしております

3 兎の街

私は、みんなを殺すような真似はしたくない。

だからといって、兄ちゃんを裏切れるワケがない。

私、戦うよ。

「あれから全く情報がないな。どうする、新八」

「放って置けるわけないでしょ？ もちろん、探しますよ」

「でも何で俺たちを呼ぶんでイ？ 他にもウザい土方さんとかゴツい土方さんとか居るでしょ」

「あ、俺も同じ事思いました。他の隊員に頼んで下さいよ。僕らも忙しいんですから」

銀時、新八、沖田、山崎の4人は今万事屋の押入の前、つまり神楽の寢床の前にいる。いきなりの行方不明事件の手がかりを見つけようと必死なのだ。

でも、沖田と山崎が来てから2時間が過ぎようとしている。今のところ全く発展はなく、皆諦めの意志が強かった。

「やっぱり無理なんじゃないですかね？　いくら真選組といえど、
こういう系の事件には慣れていなくて…」

「あ、俺も今同じ事思った」

「僕らがそんなに簡単に諦めるとでも思いますか！？　仕事を断念
してでも神楽ちゃんの捜索に当たっているんですからね！」

「と言っても俺ら仕事ないけどな、基本」

また全員が黙ってしまった。残されているのは手紙だけ、しかも相
手は天人となると捜索は難しい。それぐらい分かっていた。

「やっぱり向こうから仕掛けて来ねえと分かんねえな。俺たちは何
も出来ない。でも相手はいつでも攻めてこれる。来るべき惨事に備
えて、待っておいた方がいいんじゃないかねえのか？」

「確かに、銀さんの意見も一理ありますね…」

新八は銀時に視線を移した。どうでも良さそうな顔をしているが、
実際は神楽のことを人一倍想っている。とても心配なのだろう。

でも、本当にこちら側が動けないのは事実。やはり、銀時言つとお
りにした方がいいのか…

「…すまねえが、俺たちにはそんなことできませんねイ」

「!?!? どういう事だよ、沖田!」

沖田は山崎の方を少し見た。彼も同意見のようだが、何故か辛そうだった。

「俺たちは人民を第一としているんでさア。チャイナ娘一人の為に沢山の犠牲を生みだそうとでも言うのかイ? そんなら、チャイナ一人を犠牲に、沢山の人々を護った方が効率いいんじゃないですかイ」

「おまつ…! …そんなヤツだったのかよ、沖田。……そうだよな。お前ら真選組に頼んだのが間違いだった。いいよ、どうせ俺たちの責任なんだ。ありがとな、もう帰っていいぞ」

沖田は一度も振り返らずに万事屋を出ていった。銀時はそれを横目で見ると。黙って戸を閉めた。

「…沖田隊長…」

「仕方ないんでイ！　これが俺たちの運命さだめでさア…」

「何を言うんですか！？　たった一つの命も護れずに、沢山の人々を護れるワケがない！　俺は旦那に付いていきますよ。副長にはしばらく戻らないとでも言っておいて下さい」

「……だから真選組はイヤなんですか……」

助からない命だつてある。だから何だつてんだ…。

俺はこの国の人々を護るため、真選組に入ったんだ。

何が運命だ！^{さだめ} 何が掟だ！！

俺は自分の意志で一つの命を助けに行く。その何が悪い！

……見損なつたよ、隊長。アンタはそんな人じゃないと信じていたのに。

「…ふうん。だからお侍さんはダメだと言つたんだ。そんなカタイ

ものに縛られている。宇宙^{うちゅう}に出ていらんよ。そんなつまらないもの、捨ててしまえばいいのに」

「…お、お前は!?!」

何だよ、山崎の野郎…。

俺が真選組を裏切るとでも思ってたのか？ たががチャイナ娘一人、国民100人の命とでも軽いぐらいだ……

？ 屯所がやけに騒がしいな。何かがあったのか

「沖田隊長！！ 今まで何処に行ってらしたのですか!？」

「ど、どうしたんでイ？ 何か大変な事でも…」

「夜兎一族が江戸を攻めてきました。しかも…その襲撃があった町には山崎さんが！」

「な…なんだって!？」

「かーぐーらー どうしたんだ？ いつもよりやけに暗いじゃないか」

「な、何にもないアル。…たださっき、攻撃していった人間の中に知っているような顔があっただけネ」

「そんな事どうでもいいじゃないの。どうせ江戸は全部滅びるんだからさ。今頃この国のお偉いさんはどうしてるだろうね？ まっ

たく、江戸を潰すのが楽しみになってきたじゃないか!」

…兄ちゃんは江戸を滅ぼすことしか考えていない。そう。私たち生き残りの夜兎は今江戸を潰そうとしているのだ。正式な夜兎に伝わる服装で、伝統のある戦い方で…。

「何ポーっとしているんだよ？ 神楽も潰せばいいじゃない。この憎き江戸を。結構やりがいがあるよ？ これなら一週間は遊べるんじゃないのかな？」

私は下に広がる江戸の町を眺めた。そこには、かつて良く通っていた道や、通っていた店などがある。とても心が痛い。でも、同時に血を求め黒く渦巻いている自分の中の夜兎があった。

「…私なんかが、こんな所にいて役に立つアルか？」

「今更何を言い出すんだよ。俺はあの時、お前の中に秘められた夜兎の力を見抜いたんだ。おまえなら出来る。そう想った」

兄ちゃんは建物から一旦離れ、電柱まで飛び乗った。

「さあ、一緒にこの町を滅ぼそう。ここは俺たちを恨んでいる国だ。思う存分、暴れてやろうじゃないか」

そんな言葉に、私は軽々と乗ってしまった。

3 兎の街（後書き）

次回 夜兎、襲撃開始！！

それに対抗する万事屋 + 真選組の運命は！？

乞うご期待を！！

4 兎の戦

私は、今何をしているんだろう。

戦っている？ 違う。

夜兎を護っている？ 違う。

私は、人殺しをしているんだ。

同じ生き物同士なのに、私は人間を殺す。以前お世話になったのに、私は街を破壊していく。

夜兎の為だって？ そんなのはデタラメに決まっている。

……私は戦いたい。兄ちゃんと共に過ごしたい。でも、兄ちゃんのやっтерることは間違っている。だけど刃向かおうとは思っていない。

だって、もう二度と離れたくないから。置いていって欲しくないから……。

「かぐら〜 そろそろ休もうよ〜」

「いやアル！ 私はこの江戸を早く滅ぼしたいネ。兄ちゃんだって分かってくれるでしょ？」

「……仕方ないな。神楽は思い立ったらすぐ行動するタイプだし。そうだね。はやくぶっ潰そうか〜」

兄ちゃんはそう言つと、また傘を構えて電線や馬鹿でかい建物を破壊していく。沢山の被害が起きるように、危険なものを選んで壊す。

いつのまにこんなことをしようと思つたのだろう。銀ちゃんに吉原桃源郷を破壊された腹いせか？ それとも、何か別の意味なのだろうか……。

いずれにしても私はわからない。何故ここまで破壊を繰り返す？ 聞きたくても聞けない。そんな思いが心の中で疼く。

「そろそろターミナルに着くころだよ。どうする、神楽？ もう突撃するかい」

「兄ちゃんがそう望むのなら、私はいいいアル。勝手にするといいいネ」

「？ 変わったね。神楽…」

兄ちゃんは意味不明の言葉を残し、笑いながらターミナルの傍に降り立った。私も続いて降り立った時、懐かしい何かが私の頭の中を駆けめぐった。

「久しぶり、銀髪のお侍さん。俺の妹を取り返しに来たのか？ それともこの江戸を護ろうと」

「どっちもだ。神威、なぜ江戸を襲撃する？」

兄ちゃんはまた笑った。あの笑顔で。私には分かる。兄ちゃんは銀ちゃんと戦うために、江戸を襲撃したのだと。そのために沢山の命を奪うのだと。

私たちが吉原という名の檻を滅ぼした時、兄ちゃんは言った。本当に強い者と戦いたいと。いや、誠の強さの意志を持つ者だけと交えたいと。

それで導き出したのが、あの銀髪の侍っていう答えだ。

「…何故襲撃するかって？ そんなのは分かっているだろう」

「…？」

「俺はこの江戸を自分のものにしたい。そしてこの国の侍と、戦いたいんだ」

銀ちゃんは私を一目見ると、軽く舌打ちをして木刀を抜いた。後ろにはポロポロの隊服を着た山崎と、真剣を持った新八が控えている。3人とも私をじつと見ている。私が何も言わずに出ていったのは悪かった。でも、たとえちゃんと言い残したとしてもみんなは私を捜すでしょ？

……そんな余計な心配するからイヤなんだ。私はもう子供じゃない。

「もし、俺が勝ったら神楽を置いていくか？」

「…それだけでいいんだ。神楽は？ 何か意見はあるかい」

「……私を心配しないでって言ったアルよ？ 捜さないでって伝え

たアルよ！？　なんでそこまでして私を庇うアルか！？」

「大切な仲間だからさ。一度はお前を解雇したことだってあるよ？
それはお前の為を想っていた事だ。∴俺たちはお前の事を心から
想っている。そう信じてくれよ！」

∴私は信じない。私はもう信じたくないのよ！！

「私が戦うアル。だから、兄ちゃんは黙って見てるネ」

「仕方ないなア……。まあいいよ。さっさと片づけちゃってね」

兄ちゃんは後ろに一回転すると、瓦屋根の建物の上に飛び乗った。足を組み、呑気に傘を差しているほどだ。

兄ちゃんには関係ないだろう。妹の戦いなんて……。

さんざん置いて行かれた分、私は兄ちゃん、いや神威に見せつけてやるんだー！

…ゴメンネ、銀ちゃんー！！

4 兎の戦(後書き)

やっと4話!! ちなみに6話完結予定です: ^ ^ ;
次回は神楽VS銀時の決闘が!? 乞うご期待!

感想、評価お待ちしております

5 兎の理由

理由がある。そんなのはウソだ。ただ私は逃げているだけ。『げんじつとうひ』とかいうやつ。

兄ちゃんに置いて行かれたのは辛かった。でも、今までお世話になった分を、仇で返すのか？ 自分の幸せだけを掴むため、仲間を犠牲にするのか……。

昔、確か自分も助けて貰ったことがある。とある銀髪の侍に。その恩を忘れたとでも言うのか、自分。

彼は己の危険も顧みず、私を悪夢の中から救い出してくれた。皆が諦めていたのに、彼だけは私は死んでいないと信じて聞かなかった。

……そんなのは分かっている。いや、分かっているつもりだ。仲間がどれだけ大切かなんて、一度失っている自分は分かっていたはずだった。

夜兎は本当に悲しい一族だ。仲間同士で殺し合って、昔なんかは親まで殺す週間があった。私たちは戦場の中でしか生きていけない。そう心に刻み込んだはずなのに。

人間に迂闊うかつに触れてはいけない、信じてはいけないとそう“夜兎の血”は言っている。でも、私は自分の血なんか信じない。本当に信じる事が出来るものは……

『ホントウニ信ジラレルモノハ、自分ヲソウ裏切ツタリシナイ』

私は銀ちゃんの顔をじっと見据えて、もう一度兄の居るところへと向かった。だんだん銀ちゃん達から離れていく。大丈夫、また会えるから……

「兄ちゃん……」

「ん？ どうしたの、神楽」

私、付いて行けない。

「かぐぐらあゝ!! お父さんは悲しいです!」
「アンタいつの間にも父になつたんだよ!! 神楽ちゃん! 聞こえてますー?」

銀時と新八は神楽の心が揺れているなんて事は全く知らず、片手にメガホンでも持ちながら説得しようと試みている。でもその説得は必要なかった。

「かぐぐらあゝさん!! 本当にアナタのお父様はいらっしゃいますよー」

「え!? 本当に……ってそれただのヅラじゃないですか! そんなモノで騙されますか!」

「あ、一応言っておくけど『桂小太郎』の方じゃないよ。読者のみなさんは間違えないように」

銀時はヅラを頭に被せ、また説得を続けようとしている。どうせ意味はないのだが。

「パピーは悲しいです! 神楽をそんな子に育てた覚えはありませんっ」

「いい加減にして下さい。本当に戻ってこなくなっても知りませんよ」

新八は銀時の頭をメガホンで殴った後、もう一度前に向き直った。

「……いざとなったら力で連れ戻すしかありませんね。でも相手は夜兎だ。真選組のみなさんでも敵わないかもしれない。でも、僕は諦めません」

「おう！俺も諦めねえぞ。こんな事は慣れてる。夜兎の十人や二十人、纏めてかかってこいやああ！！！」

銀時はそう言うと、腰に差している木刀を抜いた。真剣ではないはずの木刀が光を受けて輝き、まるで自分も戦うという意志を示しているようだった。

「じゃあな、新八。次に笑うときは万事屋で、机を囲んでメシを食う時だ。3人でな」

「ええ。それでは……」

二人が飛び出したのを合図に、応援に来た真選組も一斉に斬りかかった。ターミナルの前は、もうすでに戦場と化していた。

これから始まるのが、本当の私の戦い。

私はどちらの味方でもない。どちらにも手を貸さない。私は、心から倒したいと願う相手を倒すまでだ。次に会うのは万事屋でだよ、銀ちゃん……

「神威、これからが本当の勝負ネ。私はお前を倒す。お前のやり方が間違っているから!!」

「ふうん。俺が間違っていたんだ。そんなのは気づかなかったけど」
神威はあの笑顔のまま、私に銃口を向けた。そこから飛び出る弾の威力はせいぜい知れている。それをどう避けるかが、これから戦いの鍵になる。

私の傘には、こう見えても『レーザービーム』なるモノが備わっているのだ。ついでに醤油も出るけど。でもこれは一発限りになる。これを外したらあとは醤油……しかない。

傘と傘が交わった。剣同士を交えたような金属の音がする。神威は笑顔のまま後ろに飛び去り、傘を広げ見事に地面に足をつける。

私も負けてはいられない。そのまま飛び降り、後に続く攻撃を防いだ。頬に先端が掠り、生暖かいものが流れる。

それなのに神威はかすり傷一つも負わない。少しは当たっているはずなのに、何で……

そんなの考える暇はなかった。相手は速すぎる。私も付いていけるのがやっと……なぐらいた。

相手のペースに乗ってはいけない。そうなたらコツチの負け当然だ。どうしても勝ち残るのならば、卑怯な手でも使わなくては……

向こう側では他の夜兎と銀ちゃん達が戦っている。人数は圧倒的に夜兎が少ないが、地球人の力とはかなりの差がある。こんなバケモノに付いていけるのは数えるほどしかない。

あっちも心配だけど、まずは自分の心配からだ。標的を見定め、一気に突く。それでも相手はなんのかすり傷も負わない。

力の差がありすぎる。そうは分かっているても自分は一切退かない。この身朽ち果てるまで、戦うと決めたのだから。

私は血と戦う戦士。血で戦う兄貴なんかには負けたくない。

その時、地震かと思うほどの大きな揺れが起こった。そして、江戸の象徴とっていいほどのターミナルが破壊した。

「な……なんで」

「油断しちゃダメって言うてるでしょ、神楽」

強烈な痛みが走り、下を向くと神威の腕が私の胸を貫いていた。その手は血まみれで、この血が自分のモノだと分かるまでに数秒は掛かった。

「か……むい」

私の意識はだんだん暗闇に引き込まれ、ついには目の前に何も映らなくなつた。

5 兎の理由（後書き）

次回、最終話逝つきまーーす!!!

6 兎の心

大切なものだから。

失いたくない、ものだから。

わたしは戦う。決めたんだ。何があっても、たとえ誰かを敵に回しても。

「神楽ちゃん！！！」

新八の眼には、血にまみれて崩れゆく神楽の姿がはっきりと映っていた。まだ子供と言ってもおかしくはないその後ろ姿の胸には、深々と神威の傘が突き刺さっていた。

「そ、そんなつ　神楽ちゃん！！」

新八は向きを変え、神楽の方へと駆け寄ろうとした。しかし、走り出そうとした瞬間、新八の右足に冷たい痛みが襲った。夜兔のひとり、傘から発射された豆鉄砲を足に喰らわせたのだ。

体には痛みなど走らない。どう足掻いても消えないのは、心の痛みだけ。あの時救ってあげれば、あのとき自分がもつと周りに注意を払っていれば、と反省してももう遅いときだつてある。無様にも顔面から転んでしまい、唯一の武器である竹刀をも落としてしまった。

必死で彼女の名を呼んでいるのに、この声は届かない。いくら叫んだつて、この思いは届かない。兄妹といえど、普通に斬り合い、殺しあふ。そんな状況など新八からは想像できなかった。

「新八!?」

新八に気付いた銀時が、夜兔と新八との間に走り込む。自分が犠牲になって、一人でも神楽の元へと送りだそうとしてくれたのだ。でも時はもうすでに遅かった。銀時以外に走れるものなど、もうこの近くにはいなかったのだ。

「歩ける……わけねエよな。ちょっと待ってる」

銀時はそう言うと、剣を交えていた夜兔を一閃にして払いのけた。

敵は意表を突かれたのか、一瞬の隙を見せてしまった。その隙を狙い銀時が走り込んだのはいいが、やはり戦闘部族。すぐに体制を立て直し、銀時の左腕に銃弾を数発、打ちこんだ。

だが、銀時も負けてはいなかった。左手を打ち抜かれる直前、木刀を相手の腹にねじ込んでいたのだ。その間、新八はずっと眼をつぶっていたので分からないが、大量の返り血を浴びた銀時は、まるで昔の白夜叉のような迫力を帯びていた。

「新八……行け。お前ならできる。絶対に……」

ふと新八が見上げると、夜兎の巨体が崩した建物が、銀時の真上に降り注ぐ手前だった。瓦礫は眼と鼻の先を落下しつつ、新八をよけて落ちるように降り注いでいった。

「銀さんっ！ ぎんさあああああんっっ！！」

瓦礫の崩れる音と新八の叫び声以外には、もうなにも残らなかった。

………真選組のみんなが、夜兔に敗れていつている。

新八が、ずっと叫び声を上げている。

銀ちゃんが、瓦礫の中に埋まってしまっている。

でも、なんでわたしは助けようとしらない？ ただ黙って見ているだけなの？

なんで、世界が横に傾いているの？　なんで、わたしの体が紅く染まっているの……？

ああそうだ。思い出した。わたし、また兄ちゃんに負けたんだ。兄ちゃんのいいなりになって、騙されて、わたしの大好きな江戸、わたしの大好きなかぶき町を壊していたんだ。

わたしは、どの面でも兄ちゃんに劣っている。兄ちゃんは強いし、賢いし……いつも勝ってばかりだし。

それなのに、わたしはずっと負け犬だ。ただ虚しく吠えるだけ。定春のように可愛がられもしない、ただの野良犬。でも、野良犬に生まれた方が、どれだけ楽だっただろう。こんなに沢山の人を犠牲にしなくても済む。掟ルルに縛られることもない。

わたしはなんで、夜兔に生まれただろう。せめて、普通の人間に生まれただかった。銀ちゃんや新八達と普通の人間として、出会いたかった。普通の人間の、万事屋メンバーでいたかった……。

そっだよね、決めたんだもんね。

わたしは自分と向き直って、自分の血と戦うって。血に支配されるのではなく、血の暴走を押さえてやるってね。

……だから、わたし……

「おや」

自分の胸が、血で滲んでいるのは感覚だけでも分かる。そして自分が、とてもボロボロで、ヨロヨロなことぐらい自覚している。戦うにも不便な体だっことは、一瞬にして分かった。

「まだ生きてたんだ。もう眠ってもいいだろうに。たーんと寝てしまえばいい。これはただの悪い夢なんだからさ」

ケラケラと笑う神威には、傷一つすら付いていない。服にただ塵が付着していて、黒ずんで見えることしか変化は分からない。ようやく立ち上がったわたしを見、また不愉快な笑い声を上げた。

「そんな姿で戦えるのかい？ まるであの時みたいじゃないか。悲しいだろうね、二度も他人を巻き込み、二度も兄貴に負けるなんてさ」

そう言いながら笑う神威のツラを、一発殴ってやりたくなった。殴ろうとしても、どうせ届かないんだろうけど。空ぶるばかりか、反対に余計な隙を相手にさらすだけだ。もう何も言い返す気力さえ残っていない。立っているだけで、精いっぱいだった。

「さあ、ここまで来てごらんよ。最後の対決といこうじゃないか。兄と妹との、因縁の対決……と」

神威は傘を杖代わりにして立っている。あの傘の根元さえへし折ってやれば、少しの隙は見えるのだろうに。わたしにはもう武器など、ほんの少ししか残っていない。れーざーびーむももう頼りにはならないだろうし。あとは……

「……」

「どうしたんだい、神楽。やっぱり一歩も……」

「うるあああああああああああっ！！！！」

ちゃんとした声にもならない奇声を上げつつ、わたしは傘の柄をおもいつきり押した。そこからは黒く濁った醤油が飛び出てきて、神威の視界を遮った。

「！」

「喰らうがいいネツ！！ わたしの最後の攻撃を、わたしの怒りの鉄槌を！」

壊れかけた傘の、柄をもう一度思いつきり押す。すると、傘は骨が折れるような音を立て、沢山の光を吸収し始めた。

「これでお終いだよ、兄ちゃん。わたしと一緒に、消え失せる運命なんだから」

やがて、光に包まれたように視界が白く染まっていった。あとにはなにも残らない。ただ、思い浮かんでくるのは反省と後悔だけ。

パピー、一人ぼっちにさせてごめん。マミー、わたしは立派だった？ 定治、餌の食べ過ぎはダメアルヨ。真選組の奴らはウザかったけど……ちょっとは良いヤツだったアル。

そして、銀ちゃん、新八。面と向かっては言えないけど有難う。そして……

バイバイ。

6 兎の心（後書き）

うはw 最終話まではあと一話でしたwww

結構間空けてしまってすみません><

最終はは近いうちにUPします。 でわ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7621f/>

もうひとつの吉原炎上編 - 夜の兎 -

2010年10月9日20時33分発行